

ユーラシアカワウソの人工哺育育成例

伊藤咲良

ズーラシアではユーラシアカワウソ (*Lutra lutra*) を2ペア飼育している。その各ペアにおいて、2016年8月にオス個体、2017年12月にメス個体の出産がみられた。出産から育児の様子は、寝室及び巣箱に設置した赤外線カメラ4台による画像でモニタリングを行った。産後、母親は仔を舐めたり授乳姿勢をとるなどみられていたが、時間の経過とともに落ちつきを欠き、巣箱を離れるようになるなどいずれも十分な育児が認められず、仔の衰弱もみられたため、仔を取り上げ人工哺育とした。取り上げた衰弱仔は、フリースを敷いたダンボール箱に入れ、保育室(室温約28℃)に設置した保育器に収容した。保育器内の湿度は80%とし、温度は開始時の32℃から30日齢の29℃まで徐々に低下させた。31日齢以降は、保育室内に設置したペットキャリー(60×90×68cm)に入れ、81日齢以降はカワウソ舎(室温約17℃)の寝室内で飼育した。人工哺育用ミルクは、イヌ用粉ミルク(エスビラック®)を使用し乳酸菌製剤(動物用ビオフェルミン®)を添加した。調乳濃度は粉ミルクと湯の重量比7倍から開始し、10~14日齢から徐々に濃度を上げ、15~19日齢以降離乳までは6倍にした。哺乳回数は、開始時が3時間毎(8回)で、1回の哺乳量は体重の5~7%を目安にした。10~14日齢からは4時間毎(6回)にし、60日齢以降は徐々に哺乳回数を減らすと共にアジの給与を開始した。離乳食の進行は2個体間の差が著しく、断乳までの期間は85日齢、111日齢と、幅がみられた。排泄は哺乳前後に肛門部を刺激し行ったが、便状は黄土色の固形粒状で常に良好であった。36日齢以降になると仔の活動がさかんとなり、肛門刺激によっても排泄の認められないことが多くなった。本期間の哺乳前後には室内を自由運動させていたが、40~49日齢に自力排泄がみられた。全哺育期間において体重は2例ともにほぼ順調に増加していった。2個体間で成長曲線の差がみられたが性差によるものと思われ、1例目オス個体では、開始時の57.4gから85日齢の2,025gに至る体重増加はズーラシアにおける同時期のオス個体自然成育記録と同様であった。このことから、今回の人工哺育方法がユーラシアカワウソに適したものであると考えた。